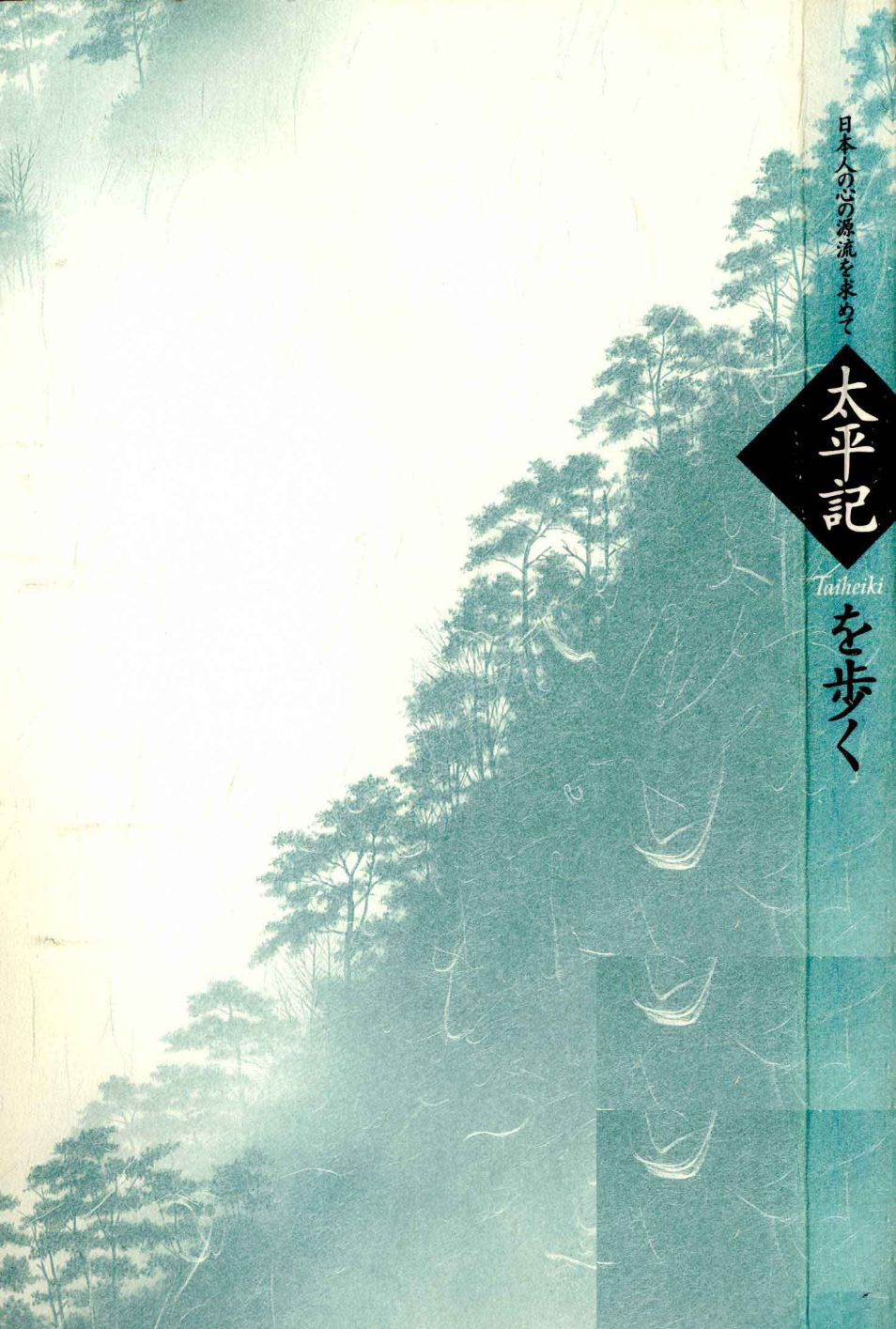


日本人の心の源流を求めて

太平記

Taiheiki

を歩く



日本人の心の源流を求めて

太平記

Taiheiki

を歩く

田中澄江

PHP

田中澄江（たなか・すみえ）

一九〇八（明治四十二）年、東京に生まれる。東京女高師（現お茶の水女子大学）文科卒業後、聖心女子学院教師、京都日日新聞記者などの職業経験をもつ。劇作家としてNHKのテレビ小説『うず潮』『虹』『花ぐるま』等の脚本を執筆。また小説家・評論家としても幅広く活躍。主著に『花に生き、花に生かされて』『かしい女性になりなさい』『花の百名山』（読売文学賞受賞）『叱り方の上手い親下手な親』『私の好きな山の花』『花と歴史の山旅』他多数。山と花をこよなく愛し、古典・歴史の世界にも造詣が深い。夫君は劇作家田中千禾夫氏で、二男一女の母。

「太平記」を歩く 日本人の心の源流を求めて 一九九一年二月二十二日 第一版第一刷発行		著者 田中澄江	発行者 江口克彦	発行所 PHP 研究所 東京本部 千代田区三番町3-10 〒100-2103（三三三九）六二二一 京都本部 京都市南区西九条北ノ内町11 〒600-1075（六八一）四四三一	印刷所 株式会社精興社 製本所 株式会社大進堂	©Sumie Tanaka 1991 Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。
--	--	---------	----------	---	----------------------------	---

ISBN4-569-53003-6

「太平記」を歩く・目次

京都市街・9

『太平記』の発端

京都御所を訪ねて

五百三十年後にめぐりきた春

天皇家の栄華の極み

六波羅蜜寺・24

倒幕の密議発覚

焼亡した六波羅探題

比叡山と鷲峰山・32

じゆふ せん

血ぬられた聖山

六百年の歳月を忘れさせる奥深い自然

東海自然歩道は戦いの道

笠置山・44

狭い狭い行在所あんざいしよ

倒幕への不屈の意志

三種の神器を死守する

東下り・57

業平も阿仏尼も越えた道

血を吸った蓮華寺れんげの五輪塔

小夜の中山と承久の乱

死出の旅路のはては

鎌倉・70

源氏とゆかり深い武士政権の本拠

海と山と切通しと

葛原ヶ岡の露と消える

栄枯盛衰を語る山辺の道

佐
渡・85

鳥も通わぬはるかなる島
阿新丸の見事な仇討ち

隠
岐・94

「黒木の御所を作りて皇居とす」

「島前」と「島後」

後醍醐帝をめぐる女性たち
御厨の港に無事上陸

名和長年と船上山の大勝利
美しき伯耆大山

吉野・熊野・122

忠臣たちの悲しい最期
大塔宮の不屈の逃避行
有間皇子の悲運を想う

イザナギ、イザナミに一心に祈る

錦の御旗をとり戻す

間一髪十津川の合戦

身代わりとなった村上義光の壮絶な死

歌書よりも軍書に悲し吉野山

天皇家抗争の歴史

さらに南下して高野山へ

石ノ上^{いそがみ}神宮に残る馬魚^{わたか}の伝説

尊氏の謀略と後醍醐帝の最期

「かへらじとかねて思えばあづさ弓」

名将楠正成・正行父子の悲劇

なぜ「建武中興」は破れたのか

千早城と四條畷・179

千対八十万の激闘

石攻め・火攻めの奇略縦横

目ざすは敵將師直^{しりなお}の首一つ

ふたたび鎌倉・195

関東の雄・新田義貞

徳川家へと続く新田家の血脈

尊氏と義貞の明暗を分けたもの

騎馬集団の合戦

北条一族と鎌倉幕府の滅亡

若き英傑・大塔宮暗殺さる

あとがきにかえて

装幀——川上成夫・こやまたかこ

装画——藤居正彦

本文写真提供——秋田書店・神長文夫・交通公社フォト
ライブラリー・佐渡汽船株式会社・竹内広光・玉岡憲
明・鳥取県商工労働部通商観光課・如意輪寺・米原町教
育委員会・水島良太

「太平記」を歩く

京都市街

『太平記』の発端

『太平記』は「大動乱記」「大乱世記」とも言いたいような内容をふんだんに盛りこんだ、規模壮大な戦記物語である。

『平家物語』は、上に天皇があつて、その下で、源氏と平氏が、組んずほぐれつの大乱闘をして、遂に源氏が、平氏を西海の藻屑になるまでに追いつめ、その息の根をとめて大勝利を得たという単純な一つの話に締めくくることができる。

『太平記』となると、京都の天皇と、鎌倉幕府の執権である北条氏が、抜きつ抜かれつの戦いを展開、北条氏が亡びて、いったん天皇方に凱歌が上ったが、その下の源氏同士が、血を血で洗うすさまじい果し合いをつづけ、天皇方も二つの系統にわかれて、北の京都の天皇と、南の吉野の

天皇と、どちらが本当の天皇かと、だれしもが、戸惑うような騒ぎになり、源氏以外の諸国に雌伏していた豪族たちがまた、時こそ至れとばかりにそれぞれに二つの天皇方の加勢をして戦い合うということなので、全く、日本じゅうが、二つ巴、三つ巴、四つ巴にからみあって、裏切りあり、至誠あり、陰謀あり、強運あり、悲運あり、恋あり、意地あり、情けありと人間のあらゆる姿を描き出して尽きぬ話題をぎつちりとつめこんでいる。応安年間（一二三二）に発表されて以来、多くの読者を持ち、語り手による多くの聴衆の心をとらえて来たのも、競争激甚の世に生きて、物語中の人物の迫る運命が、ひとつとならぬ思いを誘うのであろう。

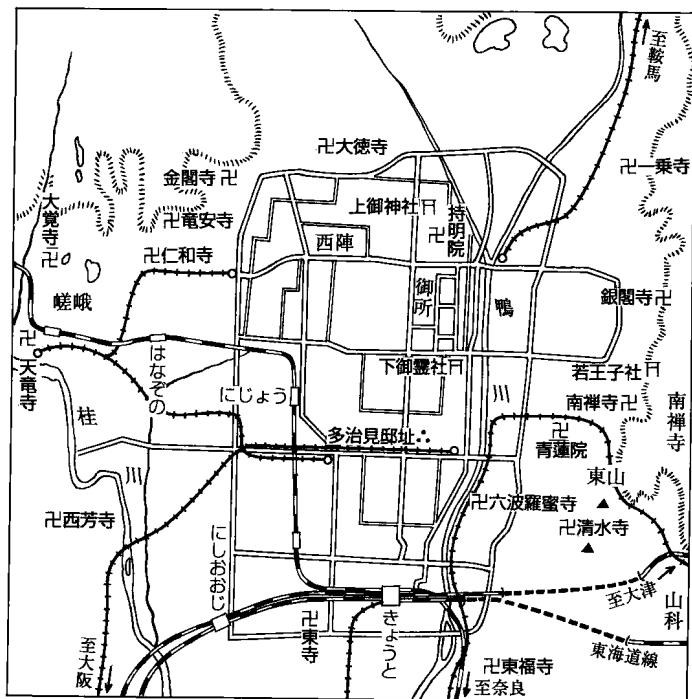
そもその動乱のきっかけとなったのは、源氏が平氏を亡ぼして鎌倉に幕府を成立させ、諸国に守護地頭をおいて、朝廷が任命した国司の地位が危うくなり、天下の富や権力は、武家側に多く占められて、天皇方の威令は行なわれず、富もまた減って、幕府の勢と反対に朝廷の力は衰えて衰えてゆく現象が顕著になったことである。

幕府の創設者である源氏の頼朝が弟たちも叔父も殺して、わが子のみによる勢力の充実を図つたのに、息子の頼家・実朝と、二人とも暗殺されて、源氏の正統が三代で亡びる機に乗じて、後鳥羽院が朝廷の勢威恢復をはかれた承久の乱はあつてなく失敗におわり、院は源氏に代る平氏の出の執権北条義時によつて、はるばると遠い日本海に浮ぶ隠岐に流され、その地で崩御。幕府は京都に北条一族の二人をおくつて、南と北に六波羅探題をおいて京都を嚴重に監視した。

しかし、北条義時から十三代目、北条高時の頃になつて様子が變つて来た。高時には天下の統

京都市街

京都市街図



治者にふさわしくない振舞いが多く、ひとから嘲笑されても平気で、民の苦しみにかまわず、田楽遊びに興じたり、闘犬に夢中になって、鎌倉の町の中はお犬様の天下となり、全国から集められた犬が四、五千匹、大事な犬は輿こしにのせられ、道であえば人間が土下座して、そのお通りを待たなければならぬというあきれた始末である。

一方に京都にあつては、後宇多院の第二皇子の後醍醐天皇が、三十一歳で御位につかれ、中国の賢人聖人の徳を慕つて、醍醐天皇の延喜、村上天皇の天曆の頃のような、よい政治をしたいとはげんでおられた。昔ながらの道を生かし、善行を表彰したので、天下の民はよろこび、神道も仏教もそれぞれに榮えて学者たちも大事にされた。

鎌倉の高時の愚行のうわさはすでに京都の朝廷にも知れ、ここに後醍醐天皇は、かねてからの望みを実行しようと覚悟をきめられ、ひそかに日野中納言資朝すけとも、藏人右少弁俊基くろつらうしやうべんとしもと、四条中納言隆資たか、尹大納言師賢いんのだいなんしけん、平宰相成輔へいさいしやうなるすけたちには胸のうちをうちあけられ、ひとびとは日野資朝の館に集まり、無礼講の宴にことよせて、計画を練った。

當時の天皇の御所や、公家たちの住まいのあとを求めて、京都への旅に出て見よう。

京都御所を訪ねて

京都の町の中心は上京区にある御所である。市バスでは烏丸一条で下車する。東西七〇メートル。南北一三〇〇メートル。北は今出川通り、南は丸太町通りに接しているが、桓武天皇が、

延暦十三年（七九四）大和の平城京から、山背^{やまし}を山城^{やまし}と改めて、東山々地の裾野に建設されたものとは位置も規模も大分ちがっている。

平城京を都とした奈良時代は、元明天皇^{げんめい}の和銅元年（七〇八）から、約八十数年つづいたが、その間に皇位継承をめぐる、また、台頭して来た新勢力の藤原氏に対立する、旧勢力との血なまぐさい事件が、長屋王^{ながやおう}、橘奈良麿^{たちばなのなるまろ}を中心として相次いで起り、藤原仲麿^{なかつまろ}の乱なども加わって決して、平安な時代ではなかった。

桓武天皇も、後醍醐天皇よりもっと年長の四十五歳で皇位に就かれ、自分の代になったら必ず、もっと平安な都づくりをしたい、対外的な意味での交通も便利なところにと思われたのである。まず、平城京をはなれて北の長岡京にと計画されたが、造営主任の藤原種継^{たねつぐ}が暗殺されるというような不吉な事件があり、更に北上して、現在の京都を都とされたのである。

京都駅のプラットホームにたつと、近ごろこの町にも見られるような高層ビルにさえぎられてはいるが、やはり京都は北と東と西を山々にかこまれ、町のまん中に鴨川^{かみがわ}が、西に桂川^{かつらがわ}が流れて、水運の便もよく、首都としての地理的条件は、はるかに平城京に勝っていることがわかる。

それに春夏秋冬の山々の眺めが美しい。私は戦後の京都の下鴨に十年近く住んで、鴨川の上に架けられた五条、四条、三条、葵、出雲路、北大路、どの橋の上から見わたしても、東山、北山、西山と、それぞれの緑のいろが、紫に、エメラルドグリーンに、鮮緑にと複雑に変っているのをよく見た。谷々が重なりあい、入り組んでいるのと、水蒸気が多いせいであろうか。

西山が陽の光にかがやいているのに、東山が霧に被われていることもあり、春は常緑樹の多い山々の緑が、いつせいに鬱黄いろの新芽の盛り上りを見せ、秋は広葉樹林が黄葉紅葉して、常緑樹の緑に映え、秋も末になると、比叡や鞍馬の奥に、新雪に粧われた近江路の比良の山々が、早や早やと冬の到来を告げていて、京都を都と定める前に、この地に巡幸されたという桓武天皇も、この風景を愛でられたのであろうと思った。

平安の女流作家である清少納言も、その『枕草子』の中に、春はあけぼのの東山の上に浮ぶ雲のかたちを、秋は夕暮れの西山の空に飛んでゆく鳥の姿を興深くとらえているけれど、じつは桓武天皇や清少納言の頃の御所は、現在の御所よりもっと西の、千本丸太町を中心にしたところであり、上京区千本通下立売下ル、市バスで千本丸太町を下車したところに、大極殿跡の標識がある。今は民家の中の空地を利用した子供たちのための遊園地になっていて、ブランコや滑台が設置されているが、地面は明らかに鴨川の河原と同じ白い砂地である。私は下鴨に住む前は、現在の御所と通りをへだてた下立売出水というところに住んでいたが、そこも白い砂地であった。山からの距離の少ない鴨川は、よく大雨のあとに洪水を起して、京の町を幾度か海のように浸水させ、そのあとに白い川砂を残したのである。

桓武天皇が造営され、平安の貴族たちが住んだもとの御所は、町造りそのものが、中国の都の長安の規模を真似て、東西四五七〇メートル、南北に五三一二メートルという広さで、町の中央を貫く朱雀大路は、大内裡の正南門である朱雀門から、南に幅八五メートル、両側に柳と桜を植